令和6年度(2024年度) 学校評価総括表　　【伊丹市立天神川小学校】

教育目標	命輝き　笑顔あふれる　天神川小学校　―心豊かで　意欲的に学び合う子どもの育成―
重点目標	(1)安心・安全に学習ができる環境づくり　(2)学力の向上と指導力の向上　(3)社会規範意識の向上を図る生徒指導の徹底　(4)一人ひとりの居場所がある学級集団づくり (5)健やかな心と健やかな体づくり　(6)家庭・地域・関係機関との連携

主要施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育 知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	確かな学力の育成 ①授業改善 ②個一人残り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	○基礎的、基本的な知識・技能を習得する ○学習指導の工夫・改善 思考力・判断力・表現力の向上 ○家庭・地域との連携を図る	・朝学習を活用し、漢字・計算の繰り返し学習や視写などを行い、基礎・基本の定着を図る。 ・教材と関連した作品や様々な分野の本を紹介し、読書への意欲を高め、読書活動の充実を図る。 ・どの教科においても書く活動を取り入れることで、学力の定着をはかる。 ・自主学習の充実を図る。 ・姿勢体操、体幹体操を取り入れ、姿勢保持や集中力の持続を促していく。 ・学習にみんなが主体的に参加できるための場づくりについて模索する。(授業にペア学習やグループ学習をとり入れる。) ・ICTを活用し、視覚的にわかりやすい授業の改善に努める。 ・単元の連続性、一貫性を持たせた授業作りにつとめる。(「ふり返り」から始まる授業作りを意識し、単元全体の授業プランを考える。 ・「めあて」と「ふりかえり」を取り入れ、見通しを持って学習に取り組み、学びの成果を可視化する。 ・主体的に取り組むために評価を活用していく。 ・学級力アンケート、学級マネジメントカチェックシートを活用していく。(安心・安全な学級づくり)	・書くこと、姿勢よくする体操を取り入れた繰り返し学習を行い、基礎基本の定着を図る。 ・教材と関連した本を読んで様々な分野の本に興味をもつ。 ・ICTの活用を含め、どの子もわかりやすい授業づくりを行う。 ・児童が主体的に取り組んでいけるように評価の仕方を全教員で検討する。外部講師を招いて指導助言を得る。 ・学級力アンケート、学級マネジメントカチェックシートを活用し、指導スキルを向上させている。	B	・体幹体操で朝学習で実施することで成果として現れ始めているが、全校で実施することが難しい面もあり、今後の課題である。 ・町書教諭と連携をとることで、様々な分野の本にふれる機会があった。 ・ICTを活用することができ、わかりやすい授業づくりができた。 ・本年度、研究発表会を通して児童が主体性に取り組んでいけるように授業づくり に励むことができた。外部講師だけでなく、市内の先生方からも意見を聞くことができた。 ・単元作りやふりかえりの系統性などは、全職員で意識して取り組むことができた。 ・学級力アンケートを実施、フィードバックを行うことで、学級の状況を児童、教員で共有することができた。	・体幹体操の一斉実施を目指し、放送で音楽をかけるなどの手立てが必要である。また、研修を通して教師側が良さを実感することも必要である。 ・単元作りの際に、計画的に読書の機会を取り入れていくようにする。 ・ICTは便利な反面、意見などを入力する際は内容が浅くなってしまうこともあるため、ICTと手書きのバランスを考えて、授業に取り入れていく。 ・評価の仕方を全職員で検討したものの、なかなか校内で共有して実施することは難しかった。 ・めあて、ふりかえりは継続して、授業内で取り組んでいくようにする。 ・実施時期や、実施頻度については検討していくべきだが、来年度も継続して取り組むことで、児童と教員それぞれの意識を高めていく。	学級力アンケート は非常に良いと思うので、続いて取り組んでいただきたい。
	新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	情報モラルの育成 ・メディアリテラシーの向上 ・タブレット活用能力の向上 ②英語や文化について体験的に理解を深める ・積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度の育成・外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるが、コミュニケーション能力の素地を養う	・職員の活用スキル向上の研修を行い、マニュアル(Zoom、ドリルパーク、クラスルーム)も作成する。 ・低・中・高の実態に合わせた向けた情報モラル研修を行う。 ・タブレットを日々の学習で活用させる。 ・ネイティブスピーカーの教師を配置している ・対話の機会を多く設ける ・授業始まりのあいさつで基本的な表現の定着を図る。 ・チャンツやフォニックスを帯活動で取り入れ、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。 ・得意・不得意にかかわらず全員が参加できるように、ゲーム活動やグループ活動を積極的に取り入れる。	・年5回のスキルアップ研修を行う。 ・連絡帳の配信をスクールタクトで行う。 ・ドリルパークを学習に取り入れる。 ・授業の中でスクールタクトを活用させる。(資料を探す、友だちと協力して資料を作る) ・外国語の表現活動を通してコミュニケーション能力を養う。	B	・スクールタクト活用向上の研修、新システム(まなびポケット)導入を円滑に進めるための活用方法、情報漏洩リスクに対する注意喚起等の研修を合計4回行った。 ・児童、職員共に、機器の操作ミス、情報モラルの欠如によるトラブルが発生していた。 ・学級閉鎖時の対応が円滑に進まなかった。 ・2学期に低、中、高の実態に合わせたゲストティーチャーによる講話を受けた。 ・おおむね定着している。 ・おおむね定着している。学習に関係ない使い方が見られる ・各学年の実態に合わせて、スクールタクトを活用できている。 ・アメリカ国籍の先生を配置して対話の機会を多く設けることで先生と子供たちの英語のやりとりの場面が多くなったが子供たちの語彙力ないのでスムーズに英語での対話が出来ない場面あった。	・ドリルパークの学年の使用頻度のムラをなくしていく。 ・児童、職員を対象に、引き続き情報機器トラブル未然防止の啓発活動を行っていく。 ・学級閉鎖時の完全オンライン学習の研修を毎年行う。また、いつ見ても思い出せるように分かりやすいマニュアルを作成していく。 ・タブレットの使用ルール改定を続ける。 ・子供たちの語彙力ないので英単語を書いておぼえる時間を毎時間設けた。	タブレットのルールは家庭とも連携して行く必要がある。
	豊かな心の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての積極的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④保護者・地域住民等による学校支援活動等の実施	規可・思いやりの心を持つ子どもの育成 ・あいさつする礼儀正しい子どもの育成～ ○児童理解のための研修会の実施 ○いじめの未然防止・早期発見 ○安心できる居場所づくり ・自分の身体を通して実地に経験することで、自ら考え学ぶ姿勢を養い、生きる力の基盤を培う。	・特別活動における集団活動や体験活動の中であいさつを実践していく。 ・児童の発達段階や実態に合わせた内容項目での教材を選び、A 自分との関わりの中で礼儀やマナーに関することやがまんすることをねらいとする授業を土台として、他人への親切・思いやりの向上を図る。 ・毎時間の学習の振り返りを記録している「道徳ノート」や授業の中での発言・態度から児童の成長を認め、励ます評価文を目指す。 ・道徳授業を深める手立てとして、ロールプレーション授業ができるようにする。(児童理解・教材研究の深まり・時間短縮) ・部会や職員会、研修会などで、児童の様子について振り返る機会を持ち、全教職員の意識を高める。 ・学級担任だけでなく、学年・学校全体で児童に関わっていく。 ・いじめアンケートを実施し、アンケート内容をもとに個別の聞き取りを行い、適切に対応する。 ・不登校傾向にある児童やその保護者と密に連絡を取り合い、登校への手立てを一緒に考え、適宜関係機関につないでいく。 ・不登校傾向にある児童のために、別室を開設する。 ・学年・子どもの発達に応じて、校外での学習や外部から講師を呼んでの出前授業を行う。 ・環境体験学習や自然学校などの野外での体験学習を行う。	・代表委員会のあいさつ運動や生活目標を生かして、あいさつのできる良い学級環境に整える。 ・児童アンケートの項目で「先生や友だちにあいさつしている」と回答する割合が80%以上になる。また、「自分を大切にすることや、他人への思いやりについて教えてくれている」と回答する割合が85%以上になる。 ・道徳ノートでの振り返りの感想には、今日の授業のねらいである感銘的価値を授えた自分との関わりの記録文が書けるようになる。(「今の自分は～」「自分だったら～」と自分におきかえて捉えられているか) ・昨年度は、全校の中で、1学年(4年生)の実践であった。今年度は、複数の学年の実践を図る。 ・毎月1回、生活指導部会を開き、情報交換を行う。また、職員会議で各学年から児童の様子を話してもらい、職員全体で共通理解を図る。 ・いじめアンケートを学期に1回実施する。 ・いじめ問題対策委員会を必要に応じて開き、すべてのいじめ案件について対策を考える。 ・保護者にこまめに連絡を取り合い、一緒に解決していこうという関係を作り、必要に応じて関係機関へつなぐ。 ・別室を開設し、毎時間職員を配置することで、だれもが安心できる居場所をつくる。 ・別室利用をする際は、事前に本人、保護者、学級担任、生活指導担当で面談を行い、利用目的やルールを確認してから正しく利用できるようにする。 ・各学年、年に1～2回の校外学習や出前授業を計画的に行う。	B	・代表委員のあいさつ運動や生活目標を活かして、あいさつのできる良いさつ学級環境を整えるきっかけを作ることができた。 ・児童アンケート「自分は先生や友だちに進んであいさつをしている。」と回答する割合が72．6%で昨年度より低くなっている。(昨年度 74．1%)また、「自分を大切にすることや、他の人への思いやりについて教えてくれている」と回答する割合が86．3%で目標の80%以上になった。(昨年度 71．7%) ・道徳ノートやワークシートの作成、ICTの活用で児童が自分の関わりの感想を書きやすい取り組みができた。成長のポイントを絞って書くことができた。 ・道徳授業を深める手立てとして、ロールプレーション授業ができた。(児童理解・教材研究の深まり・時間短縮)重点教材の向上を図る。学年の児童の全体把握ができたので子どもの指導に有効であった。 ・毎月1回、生活指導部会を開き、情報交換を行う。また、職員会議で各学年から児童の様子を話してもらい、職員全体で共通理解をすることで、学校全体の様子を共有することができた。 ・いじめのアンケートの実施により、いじめの実態把握を行うことができた。また、アンケート実施期間外においても、重大事案が発生した際には、早急にいじめ問題対策委員会を開設し、今後の対応策を考えることができた。全3回のアンケートを実施した中で、複数回いじめを訴える児童はいた。 ・やまびこの森やSSW等、外部機関と連携することで、児童だけでなく保護者への働きかけも積極的に行うことができた。 ・担当が決定してからは、人手が少ないので、別室に職員や子どもそれぞれのサポーターを配置し、連携して別室運営ができた。 ・学年の実態に応じて、校外学習や出前授業を実施することができた。	・代表委員のあいさつ運動を継続する。 学校の生活目標「目をみてあいさつをしよう」を学級で掲示し意識付ける。 ・道徳授業や学級会活動などであいさつすることの良さを指導する。 ・道徳ノートの使い方やICTの活用、子どもの実態に合ったワークシートの共有する。評価につながるノートの作成する。 ・児童理解・教材研究の深まり・時間短縮を図るために、重点教材をローテーション授業で進める。 ・登校した児童に関しては、いじめとなる行為がよくでていたとしても、継続的に経過を観察するとともに、保護者との情報共有を密に行っていく。また、学級だけの指導にとどまらず、学年での指導もしていく。 ・不登校児童を行き渋りを繰り返す児童と家庭に対して、学校だけで問題を抱えるのではなく、外部機関へ積極的に情報を共有したり、児童・保護者を外部機関つないだりして、今後も引き続き多方面からアプローチしていく。 ・今後も安心して過ごける居場所作りができるように、別室の運営を継続していく。来年度は、別室を開設する日を週の中で限定し、入り込みをする職員も地力固定化していく。そうすることで、児童との信頼関係を築きやすくなり、別室を効果的に活用していけるようにする。	授業に入らせてもらったり、支援をしていく機会が多かったので、顔を覚えてくれる児童が増えてあいさつもしてくれるようになった。
		○体力づくり ○安全に配慮した授業づくり 自分の体を知り、心身共に健康な体を作りあるとともに、基本的な保健情報を実践できる子どもを育てる。 食育 健やかな体づくりの推進 発達段階に応じた健全な食育の推進	○体育の授業の中で、運動量を確保し、運動に親しむ。 ・年間カリキュラムに沿って、多様な運動に親しみ、体力の向上を図る。 ・前年度スポーツテストの結果から、投力・持久力の弱さが見られた。授業の中で運動量を確保し、力の向上を図る。 ・熱中症に配慮しながら、外遊びを促す。 ・体育大会を全校で取り組む形に近付け、運動の楽しさを実感させる。 ・学校全体で異学年交流を含めて「長縄大会」を開催する。 ・学校全体を通して、ドッジボール大会を開催する。 ○体育の授業や休み時間に児童が自ら安全に配慮できる力を養う。 ・年間カリキュラムの中で(特に1、2年生)道具に使い方に触れ、児童が安全に体力を向上させることができるよう指導する。 ・道具だけではなく、体育で扱う道具の使い方について授業の中で指導する。 ・安全に気をけがすることも体育の主体的に学習に取り組む態度の一つであることを理解し、指導内容に入れる。 ・カリキュラムに応じた保健学習、保健学習参観、発達段階に応じた保健指導、「ほけんだより」を活用し、家庭教育と連携した保健指導の実施により生活習慣の改善を図る。 ・クラスでの保健指導の材料として使用できる「保健だより」を作成し、「保健だより」を使って保健指導をして児童が健康の大切さを意識できるようにする。 ・すくすく(チェック)(睡眠・朝ごはん・テレビやゲームなどの視聴時間) ・夏休み・冬休み後に家庭教育と連携し、生活習慣の見直しと良い習慣作りへの意識化を図る。 ・むし歯・歯肉炎の治療や視力低下児童の早期受診を呼びかける。 ・年間カリキュラムに沿って食に関する知識を増やし、食の知識の向上を図る。 ・給食だよりによって食に関する情報を配布し、産地や生産者への食に関する興味を持たせる。 ・授送受員による献立の紹介により、食の楽しさを実感させる。 ・年間カリキュラムの中で(特に2年生)栄養教諭による指導により、「食育」の食物を選択する能力を養い高める。	・「阪神タイガースゲストティーチャー」で外部講師を招き低学年で実施した。 ・学校内でドッジボール大会、長縄大会を開催し、体力向上を図った。 ・1、2年生で道具の使い方などを指導することにより、道具での怪が減った。 ・物品の管理が甘かった。 ・カリキュラム通りに授業を出来たが季節に合わせての見直しと物品の修理と購入が必要。 ・給食委員による残食調査やポスター啓発を通して、全校生に給食をたくさん食べるよう呼びかけることができた。 ・児童、保護者、教職員ともにアンケートにおいてA(よくあてはまる)またはB(やゆあてはまる)と回答する割合が児童・保護者・教職員の平均が70%以上であった。(児童69．8%、保護者98．8%、教職員73%) ・給食の配膳に関しては、衛生面に気をつけながら実施することができた。 ・アレルギー対応に関して、エピペン研修やシミュレーション研修を行い、職員の危機管理意識を高めることができた。 ・栄養教諭による、食に関する指導をカリキュラム通りにおこなうことができた。 ・アレルギー緊急対応の際、すぐにアレルギーに関する必要書類をそろえることができなかった。	B	・物品の再購入を検討する。 ・カリキュラムの見直しが必要。 ・保健の授業で、健康の大切さについて深め、保健教育の参観授業を行うとともに、ほけんだよりの配布時に学級指導をする。 ・「食のハンドブック」を授業でも少し活用できるようにしていきたい。 ・アレルギー対応は引き続き保護者と連携しながら、ダブルチェックを徹底していく。 ・アレルギーに関する書類を間違いなく、一括してすぐに取り出せるよう、保管場所や保管ファイルを再考する。	放課後、外遊びをする児童が増えてきている。公園で、体を動かして遊ぶ姿も見られるようになってきていることはとても良い。
	教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	自身と他者の気持ちを尊重し、認めることができる。他教育に学習や学校生活に取り組む姿勢の育成。 ・様々な角度からの児童理解・支援の推進。	・全国学力、学習状況調査の結果分析 ・キャリア・パスポートの活用 ・学校評価 ・学習面や友人関係に悩んでいたり、登校渋りが見られたりした時には、担任が対応するだけでなく、必要に応じてスクールカウンセリングを活用する。 ・不登校傾向にある家庭や、学校の対応だけでは改善が見込めない家庭には、生活指導担当を中心にスクールソーシャルワーカーと積極的に情報を交流し、外部機関からも支援していけるようにする。	・自身と他者を尊重し、認めることができる。 ・自発的に学習や学校生活に取り組むことができる。 ・部会での情報交換をもとに、関係機関との連携の必要性の有無を定期的に確認する。	B	・キャリアパスポートを活用しながら自分の成長を振り返り、頑張ったことなどを自覚することができ、未来の自分への方向性を考えることができた。 ・キャリア教育を通して、いろいろな夢を共有し、他者の考えを聞くことで、他者を尊重することができた。 ・全国学力、学習状況調査の分析結果を踏まえ、今後の指導の方向性を教職員間で共有することができた。 ・各学年の実態に合わせたキャリア教育を実施することで、学習や学校生活がより楽しく取り組めるようになった。 ・先を見据えた指導を増やせるよう、キャリアパスポートを活用しながら今後も取り組んでいきたい。 ・部会で情報を共有するだけでなく、スクールカウンセリングを活用したり、スクールソーシャルワーカーと連携し、外部機関の方から家庭や児童にアプローチをしてもらったり、担任だけでなく、多くの人が関わりを持って対応することができた。また、ケース会議やミニケース会議を開くことで、学校側が取り組むべきこと、外部機関ができることを共有し、組織的に対応することができた。 ・年度始めの不安感などから、4･5月の欠席日数が増え、それが年間通しての欠席日数の多さにつながってしまう。 ・出欠連絡カードを導入し、家庭との確認(欠席・遅刻)や登校時の報告など、所在確認が確実にできるようになった。	・キャリアパスポートをより効率的に活用できるように工夫をする。 ・不登校傾向にある全ての児童・家庭に対して外部機関との連携が十分にとれたわけではないので、引き続きケース会議を開き、学校側と外部機関と密に連携をとっていきたい。 ・1ヶ月に3日程度、登校渋りが見られた際には、すぐに担任、当該学年、生活指導担当など、少ない人数・短時間で情報を共有し、今後の手立てを考えるミニケース会議を今年度以上に積極的に実施していく。 ・長期欠席児童に対し、年度初めに面談を実施し、年度初めの児童と保護者の不安を和らげる。 ・今後も継続していくとともに、Googleフォームの入力の協力依頼なども継続し、最初に手間は掛かるが、その後の作業を簡単にする。	不登校に対しては、今後も協力したい。(農園やペットセラピーなど探って行きたい。)
	特別支援教育の推進 ②特別支援教育の充実	○計画的・組織的な支援体制の整備 ○個別の指導計画の作成	・共に生き、共に学ぶ力を育て合う仲間作りの実現を図る。 ・1年児童に特別支援教室の見学を行う。 ・子どもや保護者の思い・願いを受け止めながら支援する。 ・関係機関と連携を取りながら、通級指導、巡回相談やコンサルテーションなどを有効的に活用し、支援の必要な児童への理解を深め、支援方法を充実させる。 ・支援が必要な児童については校内委員会で情報を共有し、職員全体へ共通理解を促していく。必要に応じてケース会議を開く。 ・校内委員会において、教室環境の整備やユニバーサルデザインを取り入れた授業づくりなどを周知していく。 ・会議的配慮をふまえた個別の指導計画を作成し、サポートファイルステップぐんぐんや校内支援ファイルを通して、継続的な支援を目指す。	・様々な子どもの特性を共通理解する研修を年に2回行う。スキルアルップ研修を年に1回以上は行い、特別支援の知識や指導方法を磨いていく。 ・月1回の校内支援委員会が児童理解のために効果的に機能している。 ・教職員の評価アンケート「個別の指導計画に基づき一人一人の教育的ニーズに応じた指導に努めている」と回答する割合が85%以上になる。	A	・様々な子どもの特性を共通理解する研修を年に2回行った。 ・専門の先生や巡回相談、コンサルテーションなどを活用し、児童の観察及び支援の援助をいただき、支援を必要とする児童の理解に努めることができた。 ・コーディネーターが保護者との面談やコンサルテーションなどのフィードバックに積極的に参加することで、保護者や本人の困り感を知ったり支援方法を一緒に考えたりすることができた。 ・椅子の脚に付けているテニスボールの不足や破損を確認し、不足分を補うことで静かに学習できる環境を作ることができた。 ・目隠しカーテンを取り付けた。 ・教職員の評価アンケート「個別の指導計画に基づき一人一人の教育的ニーズに応じた指導に努めている」と回答する割合が96%だった。 ・個別の指導計画に内容について、研修を通して理解を図ることができた。 ・部会の共有に上がってくる児童が多く、具体的な支援方法を探る時間が取れなかった。	・研修テーマを募り、職員が学びたい研修を行い、主体的に参加してもらえるように努める。 ・関係諸機関と連携を取りながら、通級指導・巡回相談やコンサルテーション、外部の先生などを有効的に活用し、支援の必要な児童への理解を深め、支援方法をさらに充実させていく。 ・いつでも不足分を補えるようにテニスボールを準備しておく。 ・サポートファイルステップぐんぐんの意義や内容についての研修を定期的に行っていく。 ・部会の中で、コンサルテーションや巡回相談で得た支援方法等を全体に周知できるように取り組んでいく。	卒業式の姿を見て、児童の成長を感じた。
	教職員の資質向上 ①研修等の充実	■温かい、高め合い、協働して取り組む教師集団を育むための校内研修の充実	■夏季研修の時期を見直し、研修内容を夏季休業中に深められるようにする。 ■本校職員や市教委を講師とした自由参加のスキルアップ研修を若手中心に運営し、資質の向上をはかる。 ■他校の研究発表会の積極的な参加を行う。	・7月中に夏季研修を実施する。 ・スキルアップ研修を月に1回以上実施する。 ・特に若手は積極的に参加してもらったり、運営を行ったりする。 ・学期に1度学級マネジメントカチェックシートを職員会議で行い、自分のマネジメント力を振り返る機会を取ったり、結果を生かしたスキルアップ研修が行えるようにする。 ・全職員が1度は他校の研究発表会に参加できるよう呼びかける。	B	・夏季研修の時期を7月中にしたことで、研修の内容を深めたり、広げたりすることができた。 ・働き方改革の観点から、研修の内容を吟味・精選することで、時間を有効に使えるようにする必要がある。 ・スキルアップ研修は目標以上の回数を実施することができたが、1年の見通しをもって計画を立てる必要がある。 ・学級マネジメントカチェックシートをうまく活用して振り返ることができなかった。 ・他校の研究会の案内を配布したが、誰がどこの研究に参加できたか集計できなかったため、どの程度参加できたか把握できなかった。	・部会ごとに毎年研修を行う必要があるもの、2年に1度行うものなど内容を精選する機会をもつ。 ・引き続きニーズに応じたスキルアップ研修を開催できるようにする。 ・学級マーネジメント力チェックシートを活用した学年での授業交流ができる機会を設ける。 ・計画的に他校の研究発表会について案内し、参加を呼び掛ける。	校内外の研修にたくさん参加できるようになると良い。
教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	①コミュニティ・スクールの充実を図る。 ②地域・保護者との連携を図る。	①学校・家庭・地域の連携・協働体制の一層の充実を図る。 ②PTAの主催行事や地域の行事等に積極的に参加する。	①学校運営協議会を年3回開催し、児童、保護者、地域の希望に応え信頼される学校運営を行う。 ②「学校は、保護者や地域の人たちの願いに応えようとしている。」の割合を90%以上にする。	A	①学校運営評議会を年3回開催することができた。学校運営評議会の方と職員・児童が顔合わせを行い、より連帯感が増した。 ②「学校は、保護者や地域の人たちの願いに応えようとしている。」の割合が、96.9%で目標を達成できた。また、校内、校外の学習のサポートを依頼し、協力していただいた。参観に合わせて、学年と保護者が参加協力できる機会を設けた。	①学校運営協議会委員と教職員の交流の機会を増やす。働き方改革、不登校、学力について熟議していく。 ②計画的に、地域との交流・連携を図り、地域の教育力を有効に活用していく。	夏まつりなど多くの職員の参加があり、とても良かった。 年度初めの職員会で来年度も委員の紹介をする事で、職員とも交流がしやすい
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	①②③安全教育の取り組みと避難訓練の実施 ④校内の安全点検の実施 ・仕事の負担を軽減し、学級経営や学校運営などに時間を使って取り組みたい事に時間を割けるようにする。	①各種危機管理マニュアルの作成・改善 マニュアルを元に訓練を計画し、実施。 ②訓練の事前・事後指導の実施。 ③事故防止、交通安全の啓発 ④定期的な安全点検。 自然災害後の、校内の安全点検。登下校路の安全確認。 ・電話対応の時間を、定時に近づける。 ・校務調整委員会を設置し、会議の時間や負担を減らす。 ・会議の回数を減らす。 ・家庭訪問の目的を「居宅確認」とし、ポスティングのみとする。また、「兄弟姉妹を担任したことがある」「2回以上担任をしている」児童宅についてはポスティングを行わない。 ・のびる力の所見欄を3学期のみに削減する。 ・懇談の終了時刻を定時(16：45)とする。 ・スクールサポートスタッフの活用 ・学校だよりや学年通信をGoogleクラスルームで配布する。	・マニュアルを作成している。 ・各学期に1回以上の訓練を実施している。 ・訓練後にふり返りを行い、次年度への引き継ぎを行う。 ・訓練のある時に、事前・事後指導を行う。 ・長期休み前に、交通ルールについて学級指導を行う。 ・3年生時に、自転車教室を行う。 ・毎月(年間10回)安全点検を行い、安全で安心な教育環境を整える。 ・警報が発令された際、職員全体で安全点検の箇所を割り振り、児童の登校時・下校時の安全を確保する。 ・校内アンケートにて、「有事の際の組織的な体制や対応は適切である。」の問いに対して「あてはまる」と回答する割合が70%以上になる。 ・保護者の理解を得た上での、8：00～17：00までの対応にする。 ・教職員の学校評価アンケートで、「校務調整委員会を設置したことで、会議の時間・負担が減ったか」を調査し、「減った」との回答が70%以上ある。 ・事前に会議の要・不要を確認し、必要な会議のみ行う。 ・目的を「居宅確認」とし、ポスティングのみとする。 ・所見欄を削除する代わりに1、2学期は全員懇談とし、学習面や生活面等を保護者に伝える。 ・8：00～9：00の電話対応や放課後のトイレ掃除、銀行への入出金をする。	B	・マニュアルを作成し、各学年にも冊子に利用している。 ・避難訓練は年間6回行い、ふり返りから、マニュアルの更新を行った。今後も状況の変化を取り入れながら訓練を行っていく。 ・訓練の事前指導・事後指導は行った。 ・長期休み前には、交通ルールの学級指導を行った。また、校庭開放に伴い、自転車教室を1～3年生で実施した。 ・安全点検を実施し、下水の改善工事を行った。少しずつでも修繕が進んでいる。また、修繕箇所はあるので、継続して修繕の申請を行っていく。 ・今年度は警報による登下校指導はなかったが、非常時でも組織として動けるように訓練を行う。 ・校内アンケートでの「あてはまる」の回答は100%であった。保護者アンケートでの「地震や火事・不審者から自分の命を守る方法を指導している」も97．5%の肯定的な意見が出た。児童アンケートは「地震や火事・不審者から自分の命を守る方法を指導している」で90．3%の「交通ルールや遊具の安全な使い方などを教えてくれている」は85．1%の肯定的な意見が出た。 ・今年度も引き続き取り組み、電話対応の時間を定時に近づけることができた。 ・校内評価アンケートの結果、「会議の時間や負担が減った」との回答は21%に留まり、「一部の人に負担が多くかかっている」や「内容が定まっておらず分かりにくい」との回答がみられた。 ・職員連絡会をなくし、会議を減らした。 ・施策を実行し、迅速に家庭訪問を行うことができた。 ・保護者の理解も得られ、今年度から取り組むことができた。懇談の内容を精査し、適切に伝えることができた。 ・活用ができた。 ・実施できた。	・今後も、予測される事態を想定した訓練を行い、そこでの気づきをマニュアルに反映していくことで、活用しやすい物を作って行く。 ・避難訓練を通して児童に防災・防犯への意識が更に育ってきている。事前指導と事後指導も児童の実態に応じて行った。 ・今後も長期休みの前には必ず指導を行う。 ・毎月、安全点検を行い、校内で修繕できる箇所は修繕した。前年度からの水道の工事も実施できた場所もある。 ・校庭の安全点検を、年間通して職員全員で実施した。様々な視点からの気づきがあった。今後も、児童や保護者に安心してもらえるよう、訓練を通して命の大切さを伝えていく。 ・来年度は行事委員会と並行して行うことで、一部の人に負担が偏らないようにする。 ・校務調整委員会にかける項目を明記する。	

学校関係者評価総括
今年度は学校へ足を運んでの具体的な支援をたくさんしてきた。来年度も引き続き連携していきたい。地域や委員、保護者との効果的な連絡方法について今後考えていきたい。

次年度に向けた重点的な改善点
今年度は地域との連携が進んだが、年間を通しての計画が不十分であった。来年度は年度初めに学校運営協議会との連携を深めることで、より学校運営に参画していただき、地域、保護者、学校が一体となって天神川小学校の子どもたちを育てていけるようにしていきたい。

自己評価の基準　**A**:目標を上回った　**B**:目標どおりに達成できた　**C**:目標をやや下回った　**D**:目標を大きく下回った